

# フランスにおける保守主義

—ド・ボナールの政治思想—

梶 原 愛<sup>よし</sup> 巳<sup>み</sup>

## 一 フランス革命と反動思想

『フランス革命の省察』(Reflections on the Revolution in France, 1790) によつてエドモンド・バーク (Edmund Burke, 1729-97) が、大革命批判の狼煙をあげたことは、謂うまでもなく名譽革命以降の民主主義制度の発展に対して、海峡を隔てたフランスに勃発した反封建制運動の波がイギリスの貴族寡頭制に及ぶことに不安を感じた現われであつた。セルシ (H. Cecil) のいうように、「このときからイギリス政治の眞実の分裂——友だちを引きはなしてしまうほどに深刻な分裂が、新しいフランスの原理に関連があるということが明白となった。このときから人々は、フランス革命がその最初のもつとも恐るべき表現であつた運動に味方するか、それとも反対するかしなければならなかつた。したがつて、彼の祖国の安全のために個人的な友情を犠牲にしたというバークの叫び声とともに、保守主義が誕生したといつてよいであらう。」<sup>(一)</sup>

イギリスにおいては、もとより、フランス革命の衝撃によつて、

それまでの貴族寡頭制が支配する議会制度を改革しようとする広範な民主主義運動が再燃するに至つた。ここに、急進主義と呼ばれるイギリス民主主義の萌芽を見出せるが、その反作用として提起されたのがバークによるフランス革命批判であつた。

こうして、反革命のイデオロギーが、議会改革運動をすすめようとする急進主義の対立概念として、保守主義を凝集したばかりでなく、フランス革命の進行に伴いショックな事件が報道され、やがてルイ十六世の処刑が行われるや、保守主義は反動思想としての地位をますます確固たらしめ、イギリスの支配階級は対仏戦争にのりだすとともに、国内に胎動しはじめた民主主義運動を弾圧することになる。

大陸では絶対君主制と貴族的身分とが結びついて社会的・経済的におくれたドイツが、もちろんフランス革命の影響をうけたのであるが、ここでは市民階級が余りにも弱かつたために、結局、独自の民主主義運動はうまれなかつた。それゆえ、「上からの革命」が絶対主義的官僚をにない手として行われるや、これに対して不安を感じた貴族的身分は「下から」の反対運動を展開しはじめた。すなわ

ち、マンハイム (K. Mannheim) によれば、「プロシアにおけるフランス革命の本質的な影響は、フランスにおける人民と支配者との対立が、ここではV一層高い次元の△平面で繰りかえされて、国家をV下から△組み立てようとする身分(貴族)と、V上から△統治しようとするところの、官僚によって代表された王制との間の闘争として現われるという点にある。」<sup>(三)</sup>この場合、絶対主義的官僚の上からの改革は、謂うまでもなく、市民階級の保護育成のために行なわれたのであり、それに対して、不安を感じた貴族的身分が反対を叫んだのは当然であつた。ドイツの保守主義はこうした歴史的状况からうまれたのであるが、ドイツ保守主義の最初の表現である「政治的ロマン主義」(Politische Romantik)は、周知のとおり、バークの思想に負うところ大である。

フランスの保守主義は、大革命のサイクルが一区切りを見て、大陸の封建諸国が神聖同盟を結成しナポレオンの退位をせまつた王政復古の反動思潮としてうまれた。ブルボン家の復辟をアンシャン・レジームへの復帰と夢想する亡命貴族<sup>エミグレ</sup>たちは、ルイ十八世の権威を理論づける必要から中世の王権神授説を復活させ、「神の恩寵」による玉座の擁立を力説した。伝統主義の理論家としては『フランスについての考察』(Considerations sur la France, 1796)を著したジョゼフ・ド・メーストル (Joseph Marie de Maistre, 1754-1821)があり、摂理主義の思想家としてはルイ・ド・ボナール (Louis Gabriel Ambroise Bonald, 1754-1840)があげられる。彼らも、バークの影響を幾らかうけているが、要するに、フランス革命の成果を全面的に否認しようとする「反革命十字軍」であつて、大革命の「人権宣言」(Déclaration des Droits de l'Homme et du

Citoyen)を「神の権利の宣言」にかえて神政主義 (Theocratie)を唱えた。彼らは、ローマ法王の至上権のもとに絶対君主制への復帰を説くのであつて、それは極端な法王至上権主義 (Ultramon-tanisme)にほかならない。しかし、大革命によって決定的に切りひらかれたフランスの資本主義的發展の道を再び閉ざすことは不可能であつたし、それにもましてブルジョアジーは革命の成果が失われることを危うんだ。従つて、ランケ (Leopold von Ranke)も指摘したように、王政復古そのものが「過去と現在との和解への、相反する諸要求の清算への基礎」の上に立とうとする妥協の体制であつたのであつて、単なる政治的反動は歴史的必然として没落の運命をはじめから賦与されていたのである。<sup>(三)</sup>

こうした意味で、フランスの保守主義は、フランス革命の啓蒙的合理主義と無信仰主義とに対するプロテストとして、いわば「ゴシック式大聖堂の復興」を夢みながらも、既にアンシャン・レジームは過去の歴史に吞まれ、ブルジョア民主主義が勝利しつつあることを承認しなければならなかつた。従つて、王政復古の中心思想となる正統主義 (Legitimisme)は妥協的であつた。斯く、フランス王党派の保守主義は、いわゆる伝統主義に発しており、その中心は「正統性」(Légitimité)の觀念なのである。この觀念は、『法王論』(Du Pape)でウルトラモンタニスムを標榜せるド・メーストルにより既に述べられたものである。

本稿では、とりわけ「正統性」のイデーを「神的なもの」に由来せしめた、すぐれてフランス的な思想家と目されるド・ボナールをとりあげ、大革命への反作用たるフランス保守主義の拠つて立つ政治理念を概観してみようと思う。これまでに発表した『王政復古の

政治思想』や『ジョゼフ・ド・メーストルの政治思想』に関する拙稿と併せて御批判をいただければ望外の倖せである。

## 二 フランスの保守主義

インデアナ大学ザイトリン教授の近著によると、反動思想としての保守主義は以下の如く要約されている。<sup>(四)</sup>

我々は、大革命に顕現したものとして、啓蒙の諸原理がどのように保守主義の哲学的反動を生ぜしめたかをみてきた。この反動が、こんどは、「社会秩序」における新しい利害関係と種々に結びついた問題や概念を生んだのである。

バーク、ヘーゲル、ボナール、メーストルと同じく、保守主義者たちは、現に有効な秩序を温存し且つ維持しようと、全く文字通り望んだが故に保守主義者と呼ばれている。さらに、彼等の幾人かは、既に見た如く、現存秩序を温存することより、むしろ「以前の状態」(status quo ante)に復することを求めた。大革命の後にこれらの思想家たちの観察した無秩序、無政府、急進的変革が、彼等の哲学において、秩序と安定の局面に結びつく諸観念を彼等に生ぜしめた。すなわち、伝統、権威、身分、凝集、調整、機能、規範、象徴、祭式、といった諸観念がそうである。十八世紀に較べると、個人から集団へ、現存秩序の批判からその擁護へ、社会的変革から社会的安定へと、このことは利害関係の明確な転換をつくり出した。

保守主義的見地から、大革命の直後に続いて起った社会的諸変革は、基本的な社会諸制度をくつがえし破壊してしまった。さらに、

それは政治的安定の喪失に起因したのである。保守主義者たちは、ヨーロッパ史における幾つかの先行する事件と経過にこれらの諸結果を跡づけたが、その歴史は、彼等が信ずるように、中世的秩序の漸次的稀薄化と、またこの故に大革命の勃発を招来したものである。全く正確に彼等は、その主な影響力として、プロテスタンティズム、資本主義、科学を選び出した。その上、自由主義的また急進主義的な彼等の同時代人により漸進的なものとして歓迎されたこれらの諸経過は、人びとの増大するアトム化のみを導いていた。大規模の「大衆諸集団」が今や出現したのであるが、恐らくそれらは如何なる安定せる社会諸集団とも係わりがなかった。広範囲の不安、挫折、疎外は明白になり、そして、結局、一枚岩的世俗権力は、その生存が根のない大衆に依存せるものとして出現したのである。

保守主義者たちは、中世的秩序を理想化したのだが、また、この見地からすると、近代は實際上甚だ不十分であった。「哲学者たち」(philosophes)の諸原理に対する解毒剤として、また、革命後の「無秩序」に対する批判として、保守主義者たちは社会について沢山の命題を提出したのである。

1 社会は発展する国内法を持った有機的統一であり、また過去に深く根ざし、単純な個人的諸要素の機械的総計ではない。社会を構成する個人よりもヨリ大きな現実として確乎と社会を信じていたという意味において、保守主義者たちは「社会的実家たち」(social realists)であった。これは、哲蒙時代の社会的名目論への直接的反対であり、単に個人が存在するという見解や、社会は相互関係にあるこれらの個人々に与える単純な称呼にすぎぬという見解に直接反対したものであった。

2 社会は個人に先在し、且つ倫理的にも個人に優越している。

人間は社会集団あるいは社会関係の外で何らの生存も有さず、また、彼は社会に参加することによってのみ人となる。個々人が社会を構成するといったものでなく、デュルケイム (Durkheim) の用語を使うなら、道徳的教育により個人をつくり出すのが社会である。

3 個人は一つの抽象であり、社会というものの基準的要素ではない。社会は結合関係と諸制度を構成する。また個々人は幾つかの身分と役割——父、息子、祭司などを充足する社会の単なる構成員にすぎない。

4 社会の各部は相互に依存し且つ相互に関係づけられている。慣習、信仰、制度は有機的に絡み合っているから、一つの部分を變革ないし改造することは、全体として社会の安定を維持する複雑な関係を覆えすことになるであろう。

5 人間は不断の且つ不變の必要を有するが、それは各社会やそれぞれの社会的諸制度が充足してくれる。諸々の制度は斯くして基本的な人間の必要が充足される実定的機関 (positive agencies) である。若し、これらの諸機関が妨げられたり或は引き裂かれるならば、苦痛と無秩序が結果するであろう。

6 社会のいろいろな慣習や制度は確かに機能的である。それらは直接あるいは間接に他の必須な制度を役立てて人間の必要を充足もする。なお偏見がこれら諸関係に見られる。それは、いくつかの集団を統合し、また、それらの安全性の意味を増大する傾向がある。

7 小さな集団の生存と維持は社会に不可欠である。家族、隣人

関係、行政管区、宗教団体、職業集団、こうしたものは社会の基本単位であり、人間生活を基本的に支えるものである。

8 保守主義者たちはまた、「社会有機体」(social organization) を考えていた。大革命は、彼等の見たとおり、有機体の高度の形態にではなく、社会的・道徳的崩壊に導かれてしまった。彼等は、より古い宗教形態、つまりプロテスタンティズムではなく、カトリシズムを保持しようと望み、且つ中世ヨーロッパの宗教的統一を回復しようと求めた。個人の信仰の重要性を教えるプロテスタンティズムは社会の精神的統一を覆えしてしまった。さらに、ボナールの例に見られるように、都市中心主義の組織を破壊する結果、産業、商業が認識された。

9 保守主義者たちは、加えて、人間生存の非合理的局面についての必須な重要さと積極的価値を主張した。人間は、祭式、儀礼、礼拝を必要とする。「哲學者たち」<sup>フイロソーフ</sup>は、過去の不合理な痕跡である、これらの諸動態の仮借ない批評において、社会の神聖な支えを弱めてしまった。

10 身分と階層性もまた、社会に不可欠のものとして扱われた。保守主義者たちは、価値が時代から時代へと移っていったことにより、平等が「自然的」かつ由緒ある諸機関 (the "natural" and timehonored agencies) を破壊するであろうと危惧した。階層性は家族、教会、国家において必要であつたし、それなしに社会の安定はあり得なかった。

右に規定された諸命題からも分るように、フランス保守主義の基本的思想はスコラ的ヒエラルキーを社会に普遍化することであり、哲蒙主義の依拠した理性的V個人を否定し去り、アンシャン・レジ

ームへの回帰を希ったものである。そうした身分的感情がV偏見人を育て、歴史のなかにV<sup>デュレ</sup>持続人の觀念を持ち込み、フランスのV伝統人は君主政にあるとして、大革命で愚行を振舞っている共和主義者どもを指弾する。こうした後戻り<sup>レトロград</sup>的命題のため、従来のフランス革命研究は市民革命の意義を評価するに急なあまり、ナポレオンの失墜にともなう王政復古の政治理論あるいは保守主義ないし反動思想は、頭から否定される傾向にあり、「反革命のイデオロギーないし行動は殆んど扱われなかったし、一般に世界中で、またとりわけフランスで、研究らしい研究が十分に為されていない」<sup>(五)</sup>のである。このことは既に、A・コバンが「フランス革命史における最大のギャップは、逆説的に言うところ、反革命の歴史にはかならず<sup>(六)</sup>」と指摘したとおりである。

J・ゴドショによれば、「一般に左翼の歴史家は、就中、革命の運行やV愛国者どもへの理念を研究することに捉われており、右翼の歴史家は、革命について叙述する際、一部のものは屢々弁明的叙述を行ない、反革命の讚美を提示する。いずれにせよ、こうした歴史家は大学の外に在って、方法を欠き、また十分な準備をしなかった。そんなわけで、フランスでも反革命の研究は不十分であり取るに足らぬものである」<sup>(七)</sup>。さらに、反革命イデオロギーに関する研究がほとんど見当たらないことを、「反革命についての歴史家たちは、反革命論者どもが、一七八九年に在った状態に諸事を再建したいと単純に欲したばかりで、イデオロギーなどもたなかったと考えたところにある。この考えは不正確におもわれる。反革命の諸著作を読むなら、実際、これらの諸著作家は一つの理論あるいは一層正確には複数の理論を表白しているし、また、彼等のうちの極めて若

干は些かの変更もなくV旧制度への再建を夢みていたことに気付く<sup>(八)</sup>」と述べ、反革命の重要原理を検討していくが、しかし、反革命をフランスに限局する必要はない、と注意する。何故なら、バークの『省察』をはじめとする保守主義は、ヨーロッパ諸国に反動体制を構築したからである。

### 三 ド・メーストルとド・ボナール

サヴォワの法学者とも呼ばれるジョゼフ・ド・メーストルは、一七九二年九月にフランス共和国軍がサヴォワに侵入するや、それまで革命を熱狂的に歓迎していた態度を突如一変して革命を呪い、共和主義を批判する行動に出た。亡命生活の最初に執筆されたのが『フランスについての考察』である。それ以後二十年にも及ぶ根無し草のような放浪生活が続き、サン・ペテルスブルク滞在中に多彩な著述を行い、『政治的憲法および人為的諸制度の発生原理に関する試論』(Essai sur le principe générateur des constitutions politiques et des autres institutions humaines)を出版した。しかし、ロシア皇帝と意見が対立したド・メーストルは、一八一七年、一四年間に亘るサルディニア国王特命大使の役目を果たしたあと、既に共和国フランスに併合されているサヴォワに帰国したが、一切の政治活動から遠ざかり、ロシアで構想した諸著作の完成に没頭することで生涯を終えた。存命中には印刷されることのなかった彼の諸著作は、王政復古の時流にのって兎も角も出版されたが、政治的著作『主権についての研究』(Étude sur la souveraineté)を含む全集十四巻が刊行されたのは漸く一八八四年のことであった<sup>(九)</sup>。

「私は、貴男が先に書かなかったことを嘗て考えたこともありま  
せんし、また貴男が先に考えなかつたことを書いたこともありませ  
ん」とジョゼフ・ド・メーストルはド・ボナールに宛て便りを認め  
ている。しかしながら、ド・メーストルのこの書翰は、その余白に  
「この断言は、もし私に対するお世辞なら、やはり、どちらか一方  
に何んらかの例外を要する」とド・ボナールが書き込んでいる。こ  
れらの例外は、両者の氣質を徹底的に対立せしめるエミール・フア  
ゲの記述に集約されている。すなわち、ド・メーストルはペシミス  
トであり、ド・ボナールはオプティミストである。前者は錯雑で詭  
弁を弄するが、後者は直截で廻りくどいところがない。また、ド・  
メーストルは法外に逆説的であるけれども、ド・ボナールは人を安  
堵させる堅実さをもっている。さらに、前者は人を担いだり煙に巻  
いて喜ぶが、後者は頭の閃きもなく気紛れもない。いずれにしても、  
ド・ボナールは、もし自分が近代フランス政治思想史のなかでド・  
メーストルと並べられるのを知つたとしても、異存はないであろ  
う。両者は共にフランス伝統主義の系譜において論じられている<sup>(十)</sup>。  
ルイ・ガブリエル・アンブローズ・ド・ボナール子爵 (Louis  
Gabriel Ambroise, Vicomte de Bonald) は、ド・メーストルと  
同じ一七五四年に、フランスのアヴェイロン県ミローで生れた。彼  
の父 (Antoine Sébastien de Bonald) は、ルイ・ガブリエルが幼  
時の折に亡くなったので、彼の最初の教育は非常に敬虔な母によつ  
て授けられた。彼の初期の正式な勉強は、パリの小さな寄宿学校  
で始まり、十五歳になるとジュイイのオラトリアン系学院に入学し  
た。オラトリアンでは生徒たちに古典諸学の十分な基礎を教授した  
ので、その効果がド・ボナールのいろいろな著述に認められる。こ

の時期には、数学と哲学の真剣な勉強が彼に注意深い習性を陶冶  
し、また、そのことが論理——明瞭に展開された論理——を信じ、  
彼の諸著作にはその論理が極めて明白に現われている。

ド・ボナールは一七七二年にジュイイを去り、その一年程あと、  
ふとしたことから銃士隊に入り、ヴェルサイユで王に奉仕すること  
になった。ところが、一七七六年にこの銃士隊が廃止されたので、  
ド・ボナールは除隊し、南フランスのルウエルグ (現アヴェイロン  
県) で彼の属する身分に立ち還った。ヴェルサイユでの経験から政  
治生活にも興味を覚えたド・ボナールは、ミローの市長に指名され  
ると、いくらか躊躇した後この地位に就任した。そして、一七八九  
年七月のこと、彼は、国民議会、国王、財政長官ネッケル、パリ市  
に対する祝辞の起草に際し仲間の市民たちを指導した。また、Vグ  
ランド・プール人が農民の間に恐慌状態を呈し始めると、この市長  
(ド・ボナール) は市町村が一体となって自衛手段をとり秩序を維  
持すべき計画を示唆することで主導権を握つたこともあって、国民  
議会に感謝された。一七九〇年七月に、彼は選挙区の議会に選出さ  
れたので、この新しい職務を果すべくミロー市長の席を離れるが、  
程なく彼は議員を辞職したあと、亡命貴族らとともに国外流亡の旅  
に出た。このことは、自分が公職に就いていたためマークされるも  
のと憶測したからで、折からコブレンツで組織されていた抵抗戦列  
に、彼は二人の息子を伴つて参加した。こうした事情からド・ボナ  
ールは、ブルボン公に率いられた軍隊と一緒に、ナムール附近  
の不面目な戦闘に加わつたのである。

ジェマップの戦闘とデムーリエ軍の前で王党軍が敗退したあと  
軍隊も解散したので、ド・ボナールはハイデルベルクで平和に生活

しようと思つて決した。この地で彼は、二人の息子や其処で行き詰つていたフランス貴族の子息の教育に当り、辛い亡命生活に押しひしがれながら最初の著作『文明社会における政治権力と教権の理論』(Theorie du Pouvoir politique et religieux dans la société civilisée, 1796) を執筆したのである。この書物は、とりわけ探究すべき目的もないまま而も煩わしい浮世の苦勞のなかで筆が進められた。この時期のド・ボナールは、明らかに彼の歴史的知識の主な源泉としてタキトゥス (Tacitus) やボシユエ (Bossuet) やエノー (Hénault) を参照している。彼が主に攻撃を意図して筆を向けた二つの著作は、ルソーの『社会契約論』(Du Contrat Social) とモンテスキューの『法の精神』(De l'Esprit des Lois) である。ド・メーストルの『フランスについての考察』と相前後して二七九六年にコンスタンス (Constance) で刊行されたド・ボナールの『権力論』は、パリに送られるや時の執政政府に没収され、しかも不穩文書として発禁に附されてしまった。

ド・ボナールの友人にはフォンターヌ (Fontanes)、ラ・アルプ (La Harpe)、ドゥラット (Delatot)、ラクレル (Lacretelle) がいるが、とりわけロマン主義者として著名なシャトーブリアン (Chateaubriand) とは仲がよく、共同で『Mercure de France』を次いで『Journal des Débats』を主催し、同誌に政治や哲学の論文をいくつも発表している。一八〇一年には彼の小冊子『社会の家庭的立場および公共的立場より十九世紀に考察された離婚』(Du Divorce considéré au XIX<sup>e</sup> siècle relativement à l'état domestique et l'état public de la société) が現われ、その中で彼は離婚が家庭を傷つけるばかりでなく社会そのものをも損うであると

うという考慮から、離婚を認める発案に論駁を加えた。こうした彼の理念は、一八〇二年に公刊された『理性の光にのみ照して近時考察された原始立法』(Législation primitive considérée dans les derniers temps par les seules lumières de la raison) を執筆しているが、この冊子は一八一八年までは世に現われなかった。

ナポレオンの失墜とブルボン王政の復活はド・ボナールの歓迎するところであつたけれども、彼はルイ十八世の欽定憲法 (Charte constitutionnelle de 1814) を是としなかった。しかし、一八一五年三月にド・ボナールは国王からアカデミー・フランセーズに叙任されるや、この名誉ある任命に啞然となつたようである。パリに居を構えていた数年の間、彼は大いに筆を揮つて一八一七年には『諸々の話題に関する所感』(Pensées sur divers sujets) が世に現われ、同年にまた、『フランス革命についてのスタール夫人の著作に関する所見』(Observations sur l'ouvrage de Mme de Staël sur la Révolution française) と題する小冊子も公刊された。ド・ボナールの最後の主著は『社会構成原理の哲学的論述』(Démonstration philosophique du principe constitutif de la société) であるが、その内容は社会の性質に関する彼の主要理論を簡潔に再開陳したもので、一八二七年に刊行された。

一八二九年には政治生活への積極的参加より身を退いたド・ボナールは、七月王政樹立以後は正統王朝に対する顧慮を超越して公的生活に身を曝そうとせず、晩年の大部分は専ら所領地のモンナ (Monna) で幸福な平穩の日々を過ごしたのである。自分の子供たちや孫たちに取り囲まれ、彼を識るすべての人々に尊敬されなが

ら、ド・ボナールは研究生活を続けたが、一八四〇年十一月二十三日に享年八十六歳で生涯を閉じた。<sup>(十一)</sup>

#### 四 ド・ボナールの政治思想

十八世紀哲学を真向うから否定したサヴォワ貴族(ド・メーストル)と同じく、われらの保守主義者(ド・ボナール)も政治的・宗教的社會の根本的な同一性を主張する。ド・ボナールによると、社會というものは、主権の権力やその権力の行動する代理者、さいごに、それに服従する人民によつて支配されるのである。すなわち、社會とは「類似の生物が彼等の再生産と(自己)保存の目的のためにする結合」だと定義している。つまり、家族や教会や國家はひとしく普遍的かつ恒久的な自然法によつて規定されているが、この自然法は、國家の領域だと命令するのは主権の権力であり、執行するのは政府であるが、服従するのは人民であつて、万人の結合によつて利益をうけるのである。<sup>(十二)</sup>

一七九六年に公刊されたド・ボナールの『文明社會における政治権力と教權の理論』は四部に区分される。すなわち、國家における宗教、社會の位置と形成、社會における個人の位置、さいごに権力であつて、それが彼の理論の帰着点(aboutissement)である。けだし、ド・ボナールによつて、すべては幾何学的であり、彼の推論は数学的であつて、その著作は眞のピラミッドをなし、その頂点に権力の定義がある。定義の前提となるのは宗教であり、それがすべてを支配している。そして、それがド・ボナールとド・メーストルを結びつけている。しかも、その信条たるや、「神はあらゆる國家

の創造主であつて、神によらざれば、人の上の人たり得ず、神のためにあらざれば、人のものたる人たるべからず」(l'homme ne peut rien sur l'homme que par Dieu et ne doit rien à l'homme que pour Dieu)といった具合である。

ウルトラモンタンの急先鋒であつたド・メーストルに劣らずド・ボナールもまた、接觸のあつた人々について、プロテスタンティズムには極めて敵対的である。けだし、ルウエルグとミローの町には多くの新教徒がいたからである。つまるところ「宗教改革は宗教界を分裂させ、同じ無秩序を政治社會にもたらした」のであり、従つて、宗教改革こそは、まさにフランス革命の淵源にほかならない。何故なら、眞のカトリシズムは社會的統一(unite sociale)を主張しているから。若し、この社會的統一が破壊されるならば、それは宗教的統一(unite religieuse)の挫折の結果である。

次は、社會について陳べる。ド・メーストルによつてと同様、ド・ボナールによつて、社會は一つの憲法がこの社會の歴史から引き出され得る場合に構成される。ド・ボナールは、それ故、二つの社會形式を區別している。すなわち、構成された社會(société constituée)と非構成的社會(société non constituée)である。構成された社會は、成文憲法が歴史から導き出された、先在する憲法の写本でないかぎり、成文憲法の√非条理な観念を排除する。成文憲法が必要とされるのは、非構成的社會においてのみである。これらの非構成的社會は専制的(despotiques)、貴族主義的(aristocratiques)、民主主義的(démocratiques)社會である。しかし、優れた社會、つまり構成された社會は√國王君主制社會(royale monarchique)である。この種の社會の憲法は成文である



ことを要しない。それは自然力 (sa force naturelle) によつて施行される。そこに存在しているのは唯一の政治社会憲法 (une seule constitution de société politique) と唯一の宗教社会憲法 (une seule constitution de société religieuse) であつて、両憲法の統合が世俗社会 (société civile) を構成している。いづれの憲法も、√事物の本性から重さが結果すると同じく必然的に、これら両社会の各々を構成している存在者の本性 (nature des êtres) の結果である。このようにド・ボナールは、合衆国憲法をはじめとする一切の成文憲法を非難している。合衆国の成文憲法は極めて急速にこの国を破滅に導くであろう、と彼は考へている (Il estime que la constitution écrite des États-Unis amènera très rapidement ce pays vers sa perte.)

第三に「個人 (individu)」である。個人は義務を有するのみで権利は持たない (L'individu n'a que des devoirs et pas de droits.)。彼は、人間性に対し、また全てを抱括したもう神に対し義務を有する。革命は神の権利宣言により終結せらるべきであつて、それは人権宣言を無効ならしめるであろう。自らを統治する人民の権利は、あらゆる真理への挑戦である。真理とは、人民が被治者たる権利 (le droit d'être gouverné) を有するということである。

ド・ボナールは、砂粒より成つた、いわゆる近代社会なるものに帰着する一切の個人主義的哲学を非難している。そして、このイメージはナポレオン・ボナパルトに影響を及ぼすことになる。彼は、それを取り上げ且つこれらの砂粒を寄せ集めることに努める。そうすると、社会的諸団体と家族から成つていた旧社会へ立ち還る必要がある。ここには、モンテスキューの唱える√中間団体へ (corpsé

intermédiaires) の影響が認められるのであつて、それをド・ボナールは社会的諸団体 (groupes sociaux) と変更したのである。つまり、家族は原始的社會 (société primitive) であるから、社會の最初の核 (le premier noyau de la société) は、人と人との間に構成された社會、それをド・ボナールが家族的 (domestique) と呼んでいる社會であつて、父、母、子という一種の三位一体 (trinité) からそれは形成されている。こうした発想は、ド・ボナールがこよなく三分法 (la division ternaire) を愛好したことに<sup>(十三)</sup>由る。

プリミティヴな社會と看做される家族が社会的諸集團を形成している。ド・ボナールは、また、家族の上に、それら家族を寄せ集める職業 (métiers) を置き、次いで職業の集合体である同職組合 (corporation) を設ける。これらすべての社会的諸集團の総計が、公的生産と保存の社會 (la société de production et de conservation publique) を形成している。斯くして、ド・ボナールは、いわゆる文化人 (gens de lettres) と呼ばれる人たちを輕蔑している。文化人らは個人を社會の中心に置こうと望んでいる点において傲慢 (outrécuidants) だつたと、彼は考へている。それゆゑ、社會は数多の集團ないし中間団体 (corps intermédiaires) によつて形成されねばならない。最後は、ピラミッドの頂点に、すなわち、社會の頂点に權力が存する。

√王政的君主制のみが公共的社會である (Il n'est de société publique que la monarchie royale.)。ド・ボナールは、こういう二つの言葉を用いているが、それらは、彼によると、√絶対的かつ世襲の王政的君主制へ (la monarchie royale absolue et héréditaire)

ditaine) という重複法 (pléonasme) をとるものではない。斯る表現によつて、ド・ボナールは、制限も規則も知らぬ専制的君主制 (monarchie despotique) と彼の非難する選挙制的君主政 (monarchie elective) とを除外すること、何故なら、事実上それは共和政であり民主政であるから——を意味している。

王政的君主制は権力のなかに具象化され、その権力の性格たるや単一、不可分、普遍、独立、そして絶対である (le pouvoir dont les caractères sont d'être unique, indivisible, général, indépendant et absolu)。ド・ボナールが拒否するのは、それゆゑ、三権分立 (la séparation des pouvoirs)、権力の均衡 (l'équilibre des pouvoirs)、混合政体 (le gouvernement mixte) つまり議決会議 (une assemblée délibérante) をもった立憲政体 (le gouvernement constitutionnel) である。斯くて、ド・ボナールは、あらゆる混合政体を、政治的一夫多妻 (polygamie politique) と呼ぶ。すちわち、「権力は臣民から独立であらねばならぬが、法律から独立ではない。何故なら若し権力が法律から独立していると、それは専制的となるだろうし、また若しそれが臣民に依存しておれば、民主制的になるであらう。……臣民が権力となるか、権力が臣民とならないかぎり、臣民は権力の活動に従属せしめられねばならぬ。」

斯くて、ド・ボナールは、一八一四年以後ド・メーストルと同じく、ウルトラ派の理論的首長となる。王政的君主制は、ド・ボナールに親密な三位一体的体系 (le système ternaire) によつて組織されねばならない。国土を頂点とし、底辺に臣民大衆がおり、その中間には執行官 (ministres) が仲介者 (médiateurs) としてゐる。

併し乍ら、ド・ボナールは、権力が専制的となり、法から独立するのを妨げるのは誰か？と自問自答する。それは、法律制定方式である。君主政にあつては、国王が法律をつくるけれども、彼が単独でつくるのではない。法律制定にあたつて国王は、顧問会議や仲裁者や執行官によつて輔弼され、臣民から陳上される苦情 (doléances) や裁判所が提出する諫奏により助けられる。まさにこれら裁判所を包括する中間諸団体 (corps intermédiaires) および地方諸制度 (institutions locales) は、それゆゑ大きな役割、つまりブレーキの役目を演じてゐる。王政的君主制が専制的となることを妨げているのは、これら中間諸団体にほかならぬ。こうした理論開陳部分の全てが、ナポレオンによつて注目されていたらしく、彼は、中間諸団体の重要性を強調していた。

しかし、これら中間諸団体のうち、ド・ボナールは、特別な重要性をコミューンに付与している。ここにはミロー前市長の姿が立ち現われるのを見出す。コミューンは、中間諸団体の最も重要なものであるが、それは都市コミューン (la commune urbaine) ではない。何故なら、ド・ボナールは、都市、工業、それに彼が漠然とした観念しかもたなかつた工業的集中を非難しているからである。ド・ボナールにとつて、理想的コミューンとは農村コミューン (la commune rurale) であつて、労働者が一切を人から受けとる。への反して、一切を神に求める農民によつて形成されている。農村コミューンは、家族と社会的諸団体が楽しく過ごせる理想的枠を提供する。それは知名士たちによつて指導されるもので、構成された社会のモデルとなる。要するに、絶対的かつ世襲の王政的君主権により統治される、構成された社会 (la société constituée)

をつくるのは、こうした農村コミュニティの総体である。<sup>(十四)</sup>

このような論理の展開から、封建的国家は、ド・ボナールによって、大家族という風に牧歌的に描かれている。すなわち、君主が行使する主権とは、父親と似たものである。子供と父親との間に社会契約があり得ないのと同じように、また、子供は父親を選び出せないのと同じように、臣民も君主を選び出したり、君主と契約を取り交わすことはしないであろう。つまり、権力というものは、社会より先に存在しているからにはかならない。こうして、ド・ボナールは、「他の政治形態よりも」むしろ、一層大きな安定性をもっている君主政を選ぶが、この君主政において、貴族を主権者の代理だと考えている。何故なら、ド・ボナールの見解では、官職を金儲けの為に利用しようとする、あの誘惑から免れているのは、ただ貴族だけらしいのである。

ド・ボナールにも、ド・メーストルと同じように、社会契約人説に対する敵意がみられ、また自然的人間の理想化や善良な野蛮人という理論——これら十七・十八世紀に、悪い社会制度や政治制度に対する抗議を云い表わしたもの——に対する攻撃がみられる。ド・ボナールの考えによると、人類は、未で嘗て自然状態にいたことがなかった。というのは、この状態の場合、言語人がないのであるから、人類は社会状態に移ることは決して出来なかったであろう、というのである。すなわち、「純粋に自然的で野蛮で非社会的な状態のもとでは、言語の制定は必要でもなかったろうし、また可能でもなかったろう。それは、社会にとって必要となったのである。人間は、社会の外では、生れることも生活することも出来なかったから、つねに言葉をもっていたか、或はまた、全然言葉を

もっていなかったか、そのどちらかである。」要するに、自然人間は言語も、その他いかなる社会的概念も持っていないから、契約を結ぶことも、権力を選び出すこともできなかったのである。<sup>(十五)</sup>

理性は、意見人や学説人を表明しうるにすぎないから、天地創造以来人間に伝えられた神の啓示そのものである。権威人にもどるべきである。この主張は、言語の起源についての研究に基き展開されているが、ド・ボナールによれば、思想は言語と密接な関係をもち、如何なる思想も必ず直ぐに言葉に表現される。ところで、あることについての思想をもつためには、前以てその言葉を発明できなかった。それゆえ、言語、従って一切の思想は、聖書を通して世代から世代へ伝えられた神の賜物であり、従って、対話によって明確にされた憲法以外に憲法なく、宗教において神がその子を通して命じ、家で父が母を通して命ずるのと同じく、国家では君主が貴族を通して命ずる。教会、家族、政治社会が一体である結果、家族の面では離婚の不可能が、世俗社会面では王位と祭壇との必然的合一が生ずるのである。

『理性の光にのみ照して近時考察された原始立法』の注目すべき一文は、彼の法律観念を一層遺憾なく説明している。すなわち、「悪法もその起源をもっているが、善法は神より流出して、神と同じように永遠なるものである。どんな時期に人間がそれを文字で書き留めようとも、それは、ずっと昔の時代に由来しているのであって、人間自身と同じように、その誕生前に既に存在していたのである」。ここでは成程、ド・ボナールは出来る限りド・メーストルに接近している。斯くて、ド・ボナールもまた、人為的に書かれた法への服従を要求する大革命の事業は幻想的だと考え、「人間は物体に重き

を与え、物質に拡がりを与えることが出来ないように、政治的社会に憲法を与えることは出来ない」と述べている<sup>(十六)</sup>。

こうした論理から、ド・ボナールは、√人権宣言へに対して心から軽侮の念を抱いている。すなわち、√平等なる概念は、彼の√秩序への概念とは両立し得ないのであって、秩序というものは、「すべての者がいつかゴールに到達する為に、人びとの間で、誰かを他の者の先頭に行進させる技術にはかならない」。さらに彼は言う、主権は、およそ権力が神に由来するように、神の所有である。従って、法律は「神の意思であり、且つ、社会を維持する為の人間の規則」である。要するに、ド・ボナールが意図したのは、彼がその運命をともにしているブルボン王家の安定性を、どうして基礎づけようとするかであり、彼の熱望したのは、「政治の世界が春も秋も知らざる無変化の世界である」ことであつた<sup>(十七)</sup>。斯くて、フランス革命のすべての成果を否認し、理性的なものを罪惡視するところに、ド・ボナールの思想的背骨が貫かれていることを認識するのである。

(一) H. Cecil, *Conservatism, 1510-1911*, 1912.

(二) K. Mannheim: *Das konservative Denken, Soziologische Beiträge zum Werden des politische-historischen Denkens in Deutschland*, 1927. 森博訳『歴史主義・保守主義』一二六頁。

(三) ランケ『十九世紀ドイツ・フランス史』(選集、第四卷)。

(四) Irving M. Zeitlin: *Ideology and the Development of Sociological Theory*, 1968 (Indiana University), pp. 53-55.

(五) Jacques Godechot: *La Contre-Révolution, Doctrine et Action*, 1789-1804, 1961, p. 1.

(六) Cit., Alfred Cobban: *Times Literary Supplement*, 6 January 1956 (The biggest gap in the history of the French Revolution is, paradoxically, the history of the counter-revolution.)

(七) J. Godechot, op. p. 1.

(八) *ibid.*, p. 1.

(九) Cf. Francis Bayle: *Les idées politiques de Joseph de Maistre*, 1945, pp. 15-18. Robert Triomphe: *Joseph de Maistre, Étude sur la vie et sur la doctrine d'un matérialiste mystique*, 1968, pp. 23-32.

(十) Émile Faguet: *Politiques et Moralistes du XIX<sup>e</sup> Siècle*, *Première Série*, pp. 69-70.

(十一) Mary Hall Quinlan: *The Historical Thought of the Vicomte de Bonald*, 1953 (The Catholic University of America), pp. 1-3.1 《Biographical Sketch of Bonald》。

(十二) J.P. Mayer: *Political Thought in France*, 1949. 五十嵐豊作訳『フランスの政治思想』(岩波書店)五〇頁。

(十三) ド・ボナールによれば、如何なる社会にも、権力に対して特定の關係を示している三様の人物がいる。この三者とは、権力、代理者、臣民にほかならない。ここから、教会社会、家族の性格を帯びた社会、国家の性格を帯びた社会という、社会の三角形が出てくる。教会社会には神、僧侶、信者がいるし、国家の性格を帯びた社会には君主、君主の意思の執行者、人民がいるし、家族の性格を帯びた社会には、父、母、子供がいる。ド・ボナールは、各々をそれぞれ新しい三つの組に分け、それらの間の關係を次のように区別する。すなわち、第一者を原因に、第二者を手段

に、第三者を結果に。三角形は次ぎ次ぎに積み重ねられていき、それとともに三角形は新しい三角形へと分けられていく。こうして、すべての問題がこの三角形によって解決されたところのびある。Cf. C. McDonald: *Western Political Theory, The Modern Age*, 1962, p. 279.

(十四) J. Godechot, op. pp. 107-110. «C'est l'ensemble des communes rurales qui forme la société constituée, gouvernée par le pouvoir monarchique royal, héréditaire et absolu.»

(十五) Cf. J. J. Jadques Droz: *Histoire des Doctrines Politiques en France*, 1948, pp. 66-67.

(十六) Ibid., p. 66, cit., «L'homme, dit-il, ne peut pas plus donner une constitution à la société politique qu'il ne peut donner la pesanteur aux corps ou l'étendue à la matière.»

(十七) 五十嵐豊作『保守主義』（創元社刊「新版・社会思想史辞典」二〇〇—二二〇頁）参照。

（一九七一・九・五脱稿）

## 附記

本稿は、昭和四十六年十一月二十七日に予定されている九州法学会・第四十四回学術大会の報告原稿を論文の体裁に整えたものである。